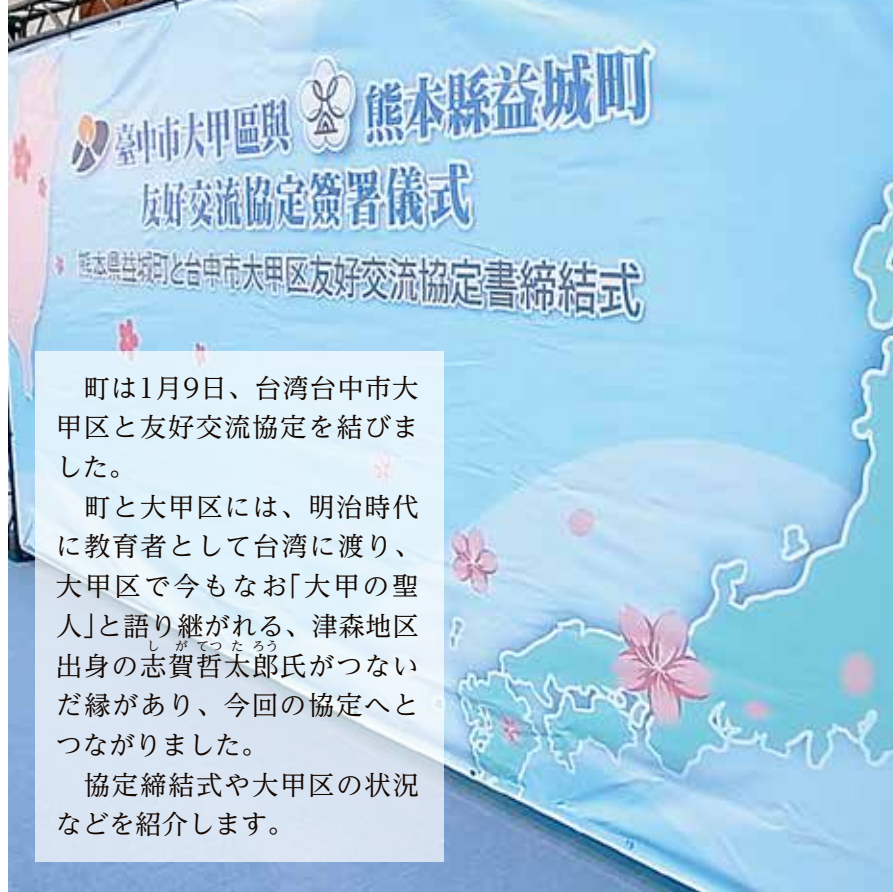


大甲の聖人が つないだ 友好の架け橋

たいわんたいちゅうし たいこうく
～台湾台中市大甲区と

友好交流協定締結～



町は1月9日、台湾台中市大甲区と友好交流協定を結びました。

町と大甲区には、明治時代に教育者として台湾に渡り、大甲区で今もなお「大甲の聖人」と語り継がれる、津森地区出身の志賀哲太郎氏がつないだ縁があり、今回の協定へとつながりました。

協定締結式や大甲区の状況などを紹介します。

「大甲の聖人」

志賀哲太郎

志賀哲太郎は、慶応元(1865)年に上益城郡田原村(現在の益城町田原)で鍛冶屋の長男として生まれました。

木山や神水の私塾で陽明学や英語、仏典などを、上京し明治法律学校(現在の明治大学)で法律を学び、九州日日新聞(現在の熊本日日新聞)勤務、菊池郡原水尋常小学校(現在の原水小学校)などの雇教員(代用教員)を経て、明治29(1896)年12月、台湾に渡りました。

台湾に渡った2年後、開校したばかりの大甲公学校の雇教員となりました。当時の台湾では、子どもも大事な労働力であり、子どもの教育に保護者の理解がありませんでした。そこで哲太郎は、学期の子どもがいる家庭を粘り強く説得。さらに、貧困家庭の子どもには学資を援助し、文房具を買い与え、病気の子がいると欠かさず見舞うなど、教え子たちをわが子のように愛し、育成しました。

それが功を奏し、大甲公学校の就学率と進学率は、台湾

志賀哲太郎



全土で群を抜く高さとなり、教え子たちは、その後各界の要職に就いていきました。

また、法律にも詳しくあったことから、教育への献身のみならず、大甲に住む住民と平等な立場で良き相談相手にもなっていました。その人柄は、「慈悲」、「節儉」、「謙虚」の3つを大事にする穏やかなものであったそうです。大甲の風土を愛し、26年間大甲に住み続け、大甲の地で生を終えました。

これら数々の功績により哲太郎は、大甲区で今もなお「大甲の聖人」と語り継がれ、住民に慕われています。

大甲区との

さらなる交流を

これまでも、平成27年に発足した「志賀哲太郎顕彰会」を中心として、大甲区との交流が行われてきました。

そこに、台湾積体電路製造(TSMC)の熊本進出が決定。町では「益城町半導体関連等企業誘致推進本部」を立ち上げ、その中の1つの組織として「国際交流部会」を設置し、台湾との交流事業について検討を進めてきました。

その結果、さらなる交流を図るため、協定を結ぶこととなりました。